

研究課題	摂食嚥下機能評価をベースとした誤嚥性肺炎患者に対するクリニカルパス策定と有効性の検討
支援番号	GC02320182
研究事業期間	平成30年4月1日から令和2年3月31日
助成金総額	830,000
研究代表者 (所属機関)	建部 一毅 (新潟南病院 リハビリテーション科)
研究分担者 (所属機関)	石田雅樹・小幡裕明 (新潟南病院 リハビリテーション科)、井上誠・辻村恭憲・真柄仁 (新潟大学大学院 医歯学総合研究科 摂食嚥下リハビリテーション学分野)
研究キーワード	誤嚥性肺炎、クリニカルパス、摂食嚥下機能評価、医療・介護連携
研究実績の概要	<p>研究の目的</p> <p>本研究は誤嚥性肺炎患者の治療体系において、根本的な原因である嚥下機能低下に注目し、摂食嚥下機能評価を基本とした治療体系のクリニカルパス（以下CP）の策定と、その実施効果の検証を目的とした。尚、本研究は、新潟南病院 倫理審査委員会（番号1709）および、新潟大学 倫理審査委員会（承認番号 2018-0145）の承認下で実施した。</p> <p>① 摂食嚥下評価表の策定と検討</p> <p>【方法】</p> <p>事前にカルテから後方視的に機能項目を検討し、誤嚥性肺炎患者の基本情報の他、全身状態、食事摂取状況、嚥下機能、口腔状態の4つの機能的側面と細項目から構成された摂食嚥下機能評価表を策定した。言語聴覚士による①介入開始時、②全身状態が安定した肺炎治療終了時、③嚥下機能が安定した介入終了時の3点による機能評価を実施、評価表の妥当性、および評価のタイミングについて、2018年11月～2019年7月に誤嚥性肺炎で本院に入院した101名（男性50名、平均年齢87.9 ± 7.4歳）について、経口摂取群と死亡・看取り群で2群比較検討した。</p> <p>【結果】</p> <p>肺炎治療終了時には、年齢、BMI、意識レベル、従命可否、咽頭吸引の要不要、排痰の可否、食事経口摂取量、含漱力、口腔ケア自立度において、2群間で有意な差が認められた。これらを独立変数、経口摂取退院を目的変数とした多重ロジスティック回帰分析の結果、食事摂取量と従命可否が有意な項目となった。</p> <p>②誤嚥性肺炎患者CP策定と有効性の検証</p> <p>【方法】</p> <p>新潟南病院内における肺炎治療フローとあわせ、フレキシブルCPを策定した。これまでの結果から、全身状態が安定した肺炎治療終了時の経口摂取量と機能に注目し、十分な経口摂取量と機能であれば退院支援を進め、一方で両者が低下している場合、患者、家族、医療スタッフとともに代替栄養・看取り等の検討、情報共有を図った。CP導入の妥当性と有効性を検証する目的で、CP導入後の2019年9月～2020年3月に誤嚥性肺炎で新潟南病院に入院した50名（男性23名、平均年齢89.9 ± 6.1歳）とCP導入前の101名で、それぞれの在院日数を比較した。</p> <p>【結果】</p> <p>CP導入前後の患者群で、介入開始時と肺炎治療終了時の基本情報や全身状態に差は認められなかった。入院から退院までの全体の在院日数の比較では、有意な差は認められなかったが、肺炎治療終了後からの在院日数の比較ではCP導入後に有意な短縮が認められた。</p> <p>【結論】</p> <p>誤嚥性肺炎入院患者に対して、摂食嚥下機能評価を基本としたCPの有効性が示された。</p>